

「神・天地に開かれる 一金光大神と参拝者の応答に注目して」

高橋昌之（教学研究所）

はじめに

教学研究所の高橋昌之と申します。現在、教義の研究に取り組んでおります。

わたしは普段、ここから見るとちょうど後側の山の上にある、教学研究所という所におりますが、ときどき、御本部広前で教話とか、このたびのような講演会などのご用で、みなさんの前でお話をする機会がございます。そのような機会をいただきますと、何を話させてもらおうかと、無い知恵を絞ってあれこれ考えたりするわけです。

また、いろいろな場所で、信者の方や金光教の教師と話をする機会もあります。そのようなとき、「どうも自分は、人に神様や信心の話をするのは難しくて…」という声も、たびたび耳にします。

このように、自分自身のことを考えてみたり、また他の方の話を聞いてみたりして感じるのは、何かをしようとしたときに、どうもそれをする自分の方に意識が向きがちだなあということです。人前で何か話すにも、今よりもっと知識を蓄え、経験を積み、自分をしっかりさせてから、というような具合です。もちろん、自分自身を高めようとする取り組みそのものは必要なことだと考えますが、ではいつになったら、「その時」はくるのか、とも思わせられます。そして、例えば信心について話すということが、教祖様のところではどうなされていたのか、というようにも考えてみるわけです。

そんな思いを持ちながら、『金光教教典』を開いてみると、いろいろと興味深いことに気づかされます。みなさんよくご存じの通り、『金光教教典』には、教祖様自身が書かれた「金光大神御覚書」「お知らせ事覚帳」に加えて、「金光大神御理解集」がございます。この御理解と申すのは、教祖様のもとに参拝された方たち（いわゆる直信）が、教祖様からいただいた言葉を自分で紙に書き取ったり、あるいは「私は教祖様からこういうことを聞かされた」というように、口伝えにしたものが、いまに伝えられたものです。つまり御理解というのは、参拝者が教祖様のもとに参拝し、そこでなされた応答を通じて生まれた言葉であるとひとまずは考えられるわけです。

教祖様から言葉が生まれる様相

そのような御理解を読んでいて注目させられるのは、参拝者からの問いかけを受けて答えた教祖様が、自分自身の口から言葉が生まれるという事実、不思議さを感じている様子が見受けられることです。その一例として、佐藤範雄先生とのやりとりを見てみたいと思います。

かつて佐藤先生は、教祖様のもとに参拝したときに、次の質問を投げかけたそうです。「金光様、あなたの教えなされる道は唯一神道でありますか、両部神道でありますか」（理解Ⅲ内伝5-2）。佐藤先生がこのような問いを投げかけたのは、当時教祖様が信心の話をされる場合に、時には白川流の神道の話や、あるいは仏教流の話をされるなど、融通無

碍なところがあり、佐藤先生としては、どうも教祖様の信心の本体がどこにあるのか、よくわからなかったからだそうです。そこで教祖様に、「あなたの教えなされる道は唯一神道でありますか、両部神道でありますか」と質問したわけです。その問いを受けた教祖様の様子を、佐藤先生は次のように伝えています。

金光様は、「そうじゃのう」と仰せられ、御領辰の年の氏子（佐藤範雄）参詣の旨お届けあり、「御領辰の年の氏子、此方は唯一神道も両部神道も知らぬ。ただ、天地の道理を説いて聞かせておる」とのご裁伝あり。いたく感じた。ご祈念すみて、ご理解となり、「此方は何も知らないでも、神様はあのように教えてくださる」と仰せられた。このご裁伝の時、身がぶるぶる奮い立ち、言語に尽くせぬ森厳なものであった。ご理解の時はまことにお静やかで、打てど波も立たぬ御有様であった。（理解Ⅲ内伝 5—2～4）

この伝えの中で注目したいのは、教祖様が「此方は何も知らないでも、神様はあのよう

に教えてくださる」と語ったとされることです。教祖様は、佐藤先生の質問に答える形で、自分の経験や知識を超える言葉を発しているのですが、そのことに教祖様自身が不思議さを感じ、また喜ばれているように思われるのです。このときに教祖様を通して生まれた言葉は、教祖様から佐藤先生へという一方通行ではなく、教祖様と佐藤先生の両者にとって意味を持つものになっていると言えるでしょう。

このことを確認した上で、もう一度、二人のやりとりを見てみると、佐藤先生の問いかけ（「唯一神道か両部神道か」）に対する、教祖様の答え（「どちらも知らない。ただ、天地の道理を説いて聞かせている」）とは、必ずしも噛み合っているとは言えません。「右から左か」という形で問いを投げかけた佐藤先生からすれば、教祖様からの返答は答えとして成り立っていないと考えられるのです。

しかし、それにもかかわらず、佐藤先生はこの時のことを、「いたく感じた」「身がぶるぶる奮い立ち、言語に尽くせぬ森厳なものであった」と振り返っています。このことは佐藤先生にとってどういう経験だったのでしょうか。おそらく、佐藤先生の考える枠組みで教祖様の信心を計ろうとして投げかけた問いと、さらにはその問いを投げた自分自身のあり方そのものが、教祖様の答えにより、根本から覆されたのではないのでしょうか。

この一連の流れを見てきますと、教祖様が佐藤先生に答えた、「御領辰の年の氏子、此方は唯一神道も両部神道も知らぬ。ただ、天地の道理を説いて聞かせておる」という言葉が、単に、信心や現実のこの世界を説明する言葉ではないことが分かってきます。そうではなくて、むしろ、この言葉が教祖様の口から生まれることによって、佐藤先生と教祖様の間に、新しい世界が開かれたのではないのでしょうか。この教祖様の言葉に触れた佐藤先生は、「いっさい万事晴れてしまって、さっと心中が晴れてしまった」とも述べています。

そうして大切なのは、「御領辰の年の氏子、此方は唯一神道も両部神道も知らぬ。ただ、天地の道理を説いて聞かせておる」という言葉は、教祖様にとっても、自分の知識や経験を超えて発せられていたことです。教祖様は佐藤先生からの問いを受けたとき、自分に分かったものとして答えず、神様に祈り、その上で言葉が出ています。教祖様自身、神様や天地に関わることは、どこまでも分からないこととしながら、それらのことを語らさ

れる自分自身への謎を抱えていたようです。その教祖様の口を通して、驚きをもって語られる神様や天地にかかわる話が、参拝者に響いていたこととは深く関連していたと考えられます。

そこで次に、教祖様と参拝者との間で言葉が生まれるに際しての両者の関係について、教祖様が自分のことを、不思議さを伴って捉えている事例をもとに述べてみたいと思います。

金光大神と参拝者の関係に向けて

ここからは、徳永健次先生の伝える御理解をもとにお話を進めたいと思います。徳永先生は山口県の熊毛教会を開かれた先生です。

徳永先生は、現在の山口県熊毛郡の生まれで、幕末には長州藩士として幕府軍との戦いに出向くなどしていましたが、廃藩後には農業に従事していました。ところが明治15年の春に眼病を患われ、唐樋常蔵先生のもとへ参拝するようになりました。教祖様のところに初めて参拝したのは、その年の12月です。それは教祖様が亡くなる前年、つまり最晩年のことでありました。

徳永先生の住んでいたところから、この大谷までは50里（約200キロメートル）あったそうです。この初参拝の時、徳永先生は近くに住む人たちと一緒に船を借り切って来たとのこと。今でこそ、200キロという距離は、電車や車で日帰りできる距離ですが、交通手段も発達していない当時、まして眼病を患った徳永先生にとっては、決して楽な距離ではなかったと想像されます。その初参拝時に、徳永先生は教祖様から次のような言葉をかけられたと伝えています。

周防のお方、私のことを人が、神、神と言いますが、おかしいではありませんか。私が、なんの、神であろうぞ。私は、何も知らぬ、土を掘る百姓であります。東京辺りから官員方がたくさんにみえまして、「人が神になると言うが、違いはない。人が神になるのじゃ」と言われます。あのかもいに張ってある名刺をご覧ください。たくさん張ってあります。これへおいでなされるお方が神様であります（参る人を指して、神と言われたり）。あなた方が神様のお子でありましようが。生神ということは、ここに神が生まれるということでもあります。私がおかげの受けはじめであります。あなた方もそのとおりにおかげが受けられます。 （理解 I 徳永健次 2）

このご理解では、人々が教祖様を呼ぶときの「神」という呼び名と、それに対して教祖様自身が自分を捉える「土を掘る百姓」とが、対照的に描かれています。眼病のおかげを頂きたい一心で、遠路はるばる教祖様のところに参拝した徳永先生にしても、おそらく、教祖様を「神」と見ていた周囲の人と似たような思いを、教祖様に抱いていたのではないのでしょうか。

ところが、当の本人である教祖様は、自分のことを「土を掘る百姓」を言われている。徳永先生にとって、自分をはじめとする多くの人間と同じ「百姓」と、教祖様が名乗っていることは、ある意味で事前の期待を裏切られる出来事ではなかったのでしょうか。

また教祖様はその後で、「生神ということは、ここに神が生まれるということでありませぬ。私がおかげの受けはじめであります。あなた方もそのとおりにおかげが受けられます」とも語っています。ここからは、教祖様が自分のことを、徳永先生など参拝者と同じ立場、つまりここから「生神」になりうるものだと確認し、今現在も、神様を求めながらの歩みを進めている、と把握していたことが窺われます。

先に見たとおり、教祖様は周りの人から神や天地に通じた存在、すなわち「神」と見られていました。しかし教祖様自身は、神様や天地のことはどこまでも解り得ないものとして求める営みを続け、自分自身が神や天地に開かれていたと考えることができます。そのようにして求め続ける営みが、「土を掘る百姓」という表現になって語られているのではないのでしょうか。

ところで徳永先生の伝えでは、教祖様は自分のことを「土を掘る百姓」と呼んでいます。たとえば福嶋儀兵衛先生の伝えでは、自分は「生神」ではなく「あなたがたと同じ生身の人間」と語ったり、近藤藤守藤守先生先生に対しては「肥かたぎ」である、と語りしています。

人は此方のことを生神であると言うが、此方でも、あなた方と同じ生身の人間である。信心しておかげを受けているまでのことである。(中略) あなたも、神様の仰せどおり真一心に神信心しておかげを受け、人を助けて神にならせてもらうがよい。

(理解Ⅱ 福嶋儀兵衛 1)

私は生神ではない。肥かたぎである。天地金乃神様に頼めばよい。私は、ただ神様に申しあげるだけのことである。

(理解Ⅱ 近藤藤守 3)

これらを通じて大切だと思われることは、いずれも教祖様のことを「神」「生神」と見ようとする参拝者の存在によって、教祖様はその都度、「土を掘る百姓」「肥かたぎ」「あなたがたと同じ生身の人間」というように、神様との差異として、自分自身を捉え直していることです。つまり教祖様のもとに参拝した人は、それぞれに自分が頂いたおかげの事実を伝えていますが、一方で教祖様も、参拝者の存在によって自分のことを「土を掘る百姓」というように見出し、そのことを通じて、より神様や天地に開かれていく契機を得ていたと見ることもできるのです。

ちなみにこの初参拝時に、徳永先生は眼病の全快を願って参拝したとされますが、徳永先生が書き残した教えの中には、眼病に直接触れられたものは見られません。その代わりに書き記されているのは、「天地金乃神とはどのような神様か」「人間が持っている可能性」「毒立てや鍼灸のこと(不要性)」「暦のこと」「農作業を通じて知らされる神様の働き」などです。

このことから徳永先生が、眼病をきっかけとして参拝したものの、教祖様の口から語られる神様や天地の話に驚かされ、それらとの関係で自分という人間も改めて見させられていたことを窺うことができます。この初参拝時に徳永先生は、教祖様から「私の話はいつまでも尽きることがないから」と、帰宅を促されていますが、逆に言えば、それほどに教祖様の話を求め、向き合っていたことが窺われます。このような徳永先生の向き合い方が、教祖様の口からさらに言葉を生むという、両者の関係を見ることのできるのではない

でしょうか。

おわりに

ここまでお話ししてきたとおり、教祖様の言葉は、目の前の参拝者をはじめ、周囲に自分を開いていくところに生まれていました。そしてその根底には、神様や天地の知りがたさを知らされながら生きる営みがありました。この生き方は、徳永先生の例からもわかるように、教祖様の最晩年まで続いていたようです。

教祖様はそのようなこととして結界に座り、参拝者との間で生まれる世界に触れて、自分という人間や信心も形作られていたのではないのでしょうか。それはこのお話の最初に触れたような、自分の中にいろいろな知識をため込み、しっかりさせようとする方向とはまた異なり、様々なものに開かれ、触れながらおかげをうけていく、人間のあり方を示していると思われるのです。